

日本人フランス語学習者に見られるneの脱落について

フランス語, ポルトガル語, 日本語, トルコ語の対照中間言語分析 第4回研究会「中間言語における諸問題(3)」

2017年7月31日@東京外国語大学本郷サテライト
近藤野里(名古屋外国語大学)

始めに

- L2における社会言語学的能力

- « the capacity to recognize and produce socially appropriate speech in contexte » (Lyster, 1994)

- (「コンテクストに応じて社会的に適切なスピーチに気づき、産出する能力」)

- 日本人フランス語学習者の発話を対象とした(社会言語学的)研究はそれほど多くはない。

- 語彙に関する研究: 杉山(2011, 2013)

- 発音に関する研究: 近藤&川口(2009), 近藤(2010), Detey *et al* (2015)

始めに

- 本発表では日本人フランス語学習者の発話を対象に社会言語学的特徴の頻度を観察する。

否定の副詞neの脱落

先行研究

- Je parle français. (私はフランス語を話します。)



- Je **ne** parle **pas** français. (私はフランス語を話しません。)
→ Je ~~ne~~ parle **pas** français.

先行研究

- ネイティブスピーカーの発話におけるneの脱落頻度
(cf. Dewaele, 2004)

	formal	informal
Ashby (1981)	40%	61%
Ashby (2001)	50%	88.6%
Armstrong (2002)	97.1%	98.9%

先行研究

- ネイティブスピーカーの発話における脱落頻度
(cf. Dewaele, 2004)

	formal	informal
Ashby (1981)	40%	61%
Ashby (2001)	50%	88.6%
Armstrong (2002)	97.1%	98.9%

11～12歳、16～19歳の若者の発話におけるneの脱落の割合

先行研究

- L2での脱落頻度の特徴(Dewaele & Regan, 2002)
 - ベルギーのオランダ語話者の大学生27人(18才～21才)
 - 発話コンテキストの違い:
12.2% (formal) vs 15.4% (informal) 有意差なし
 - フランス語母語話者とのやり取りの多さ:
17% (日常的) vs 7.3% (教室のみ) 有意差あり

コーパスについて

- 2010年東京外国語大学での録音（インタビューと自由会話）
 - 「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(基盤研究A)
- インフォーマント: 11名 (学部3年生～大学院生)
- 年齢: 21歳～30代
- フランス語学習期間: 3年～10年以上
- フランス語圏への留学経験: 留学経験あり(3名) なし(8名)

neの脱落 (L2)

	L2
ne の実現	103
neの脱落	101
脱落の%	49.51% (101/204)

脱落の%: 0% ~ 84.62%

84.62% = 3年以上のフランス語圏への留学経験を持つインフォーマント



留学経験あり vs 留学経験なし

neの脱落 (L2)

	留学経験なし(8人)	留学経験あり(3人)
neの実現	74.52% (79/106)	24.48% (24/98)
neの脱落	25.47% (27/106)	75.51% (74/98)

留学経験があるインフォーマントの発話において、neの脱落頻度が高い。(有意差あり、 $p < 0.05$)

neの脱落 (L2)

	インタビュー	自由会話
ne の実現	50.96% (53/104)	53.70% (58/108)
neの脱落	49.04% (51/104)	46.34% (50/108)

- (1) formalおよびinformalな発話コンテキストで類似している？(有意差なし)⇒ formalとinformalのコンテキストに応じて、脱落の有無を調整するというわけではない。
- (2) インタビューがformalなコンテキストとして捉えられていない可能性もある。

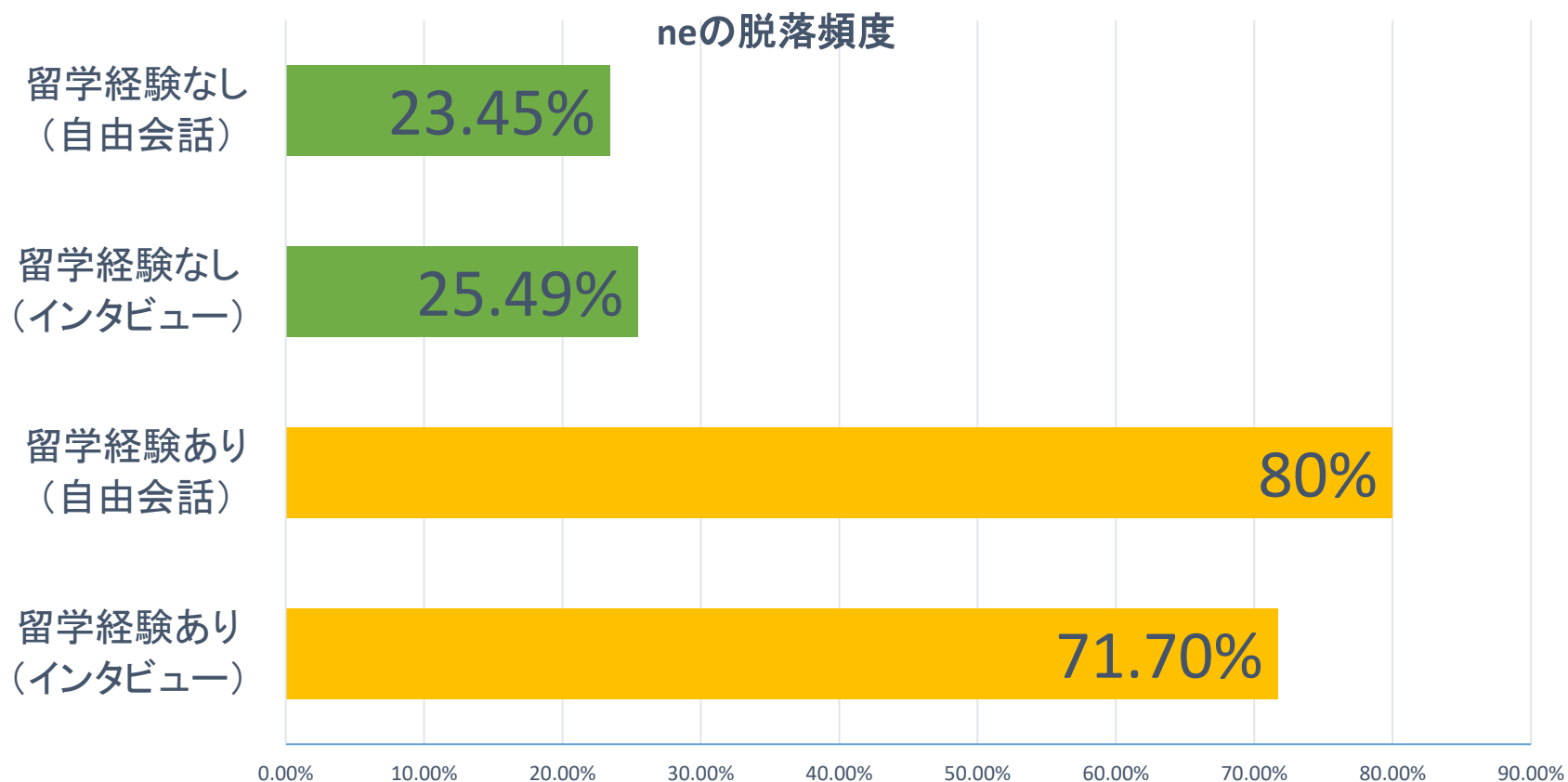
neの脱落 (L2)

formalとinformalのコンテクストに応じて、脱落の有無が調整されていないのであれば、



留学経験の差はformalとinformalの脱落頻度の違いに影響する？

neの脱落 (L2)



インタビュー者の発話における neの脱落

- 今回の報告のためにインタビュー者の発話のneの脱落頻度の観察を行った。(4ファイル分)
- neの脱落頻度: 17.65% (3/17)

インタビューアとの比較

	留学経験なし (8人)	留学経験あり (3人)	インタビューア
ne の実現	74.52% (79/106)	24.48% (24/98)	82.35% (14/17)
ne の脱落	25.47% (27/106)	75.51% (74/98)	17.65% (3/17)

考察

- 学習者の発話において、formalとinformalの違いで、脱落の頻度に変化はほとんどない。
- インタビューと自由会話にformalとinformalを使い分ける必要性がないと判断している？
- ただし、インタビュアーは、基本的にはvousで会話をしており、neの脱落および/l/の脱落も最小限である。

考察

- « je sais pas », « il y a pas »などneが脱落した形に固定している場合もある。

脱落の固定化

	avoir	être	savoir	その他の動詞
実現	18	29	19	39
脱落	24	17	38	18
合計	42	46	57	57
neの脱落頻度	57.14%	36.96%	66.67%	31.58%

脱落の固定化

- avoirを含む連辞« *il y a pas, j'ai pas, j'avais, t'as pas, etc...* »
- *savoir*を含む表現で*ne*の脱落が起こるのは常に、「*je sais pas*」という連辞である。
- 音声実現が[ʒ(ə)sepa]だけではなく、さらに音声省略が起こった [jepa]のような発音も観察される。

今後の予定

- 分析する録音ファイルの数を増やす。
- 母語話者インフォーマントの発話の分析も引き続き行う。

参考文献

- Dewaele, J-M. (2004). Retention or omission of the ne in advanced French Interlanguage : The variable effect of extralinguistic factors. *Journal of Sociolinguistics*, 8-3, pp. 433-450.
- Dewaele, J-M. & Regan, V. (2002). Maîtriser la norme sociolinguistique en interlangue française : le cas de l'omission variable de ne. *French Language Studies*, 12, pp. 123-148
- Howard, M., Lemée. I. & Regan, V. (2006). The L2 acquisition of phonological variable: the case of /l/ deletion in French. *French Language Studies*, 16, pp. 1-24.
- Lyster, R. (1994). The effect of functional-analytic teaching on aspects of French immersion students' sociolinguistic competence. *Applied Linguistics*, 15, pp. 263-287.
- Detey, S., Kawaguchi, Y. & Kondo, N. (2015). La liaison chez les apprenants japonophones avancés de FLE : étude sur corpus de parole lue et influence de l'expérience linguistique. *Bulletin suisse de linguistique appliquée Vals-Alsa*, 102, pp. 123-145.
- Mallet, G. (2008). *La liaison en français: descriptions et analyses dans le corpus PFC*. Thèse de doctorat: Université Paris Ouest-Nanterre-La Défense.
- 近藤野里(2012).「自然会話と教科書におけるリエゾン — Aixコーパスとフランス語教科書を用いた比較分析」, 『外国語教育研究』, 15号, pp. 37-53.